

青梅市文化財ニュース

第300号

平成24年10月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684 Tel.0428-23-6859）

祈雨止雨

日本は四季に富んだ気候で、自然の恵みにより農作物がたわわに収穫されますが、ひとたび自然が猛威をふるうと甚大な被害をもたらします。そして度々悩まされるのが旱魃^{かんばつ}や風雨で、古来より朝廷による祈雨^{きうきしう}や祈止雨^{にう}の儀礼が記録されています。奈良の丹生川上神社^{かわかみ}や京都の貴船神社は、その特定社として知られ、祈雨の際は「黒毛馬」、祈止雨の際は「白(青)毛馬」が奉納されていました。そしてごく最近まで、旱魃のときは各地域の川上に鎮座する神社に参拝し雨を願い、関東では特に大山阿夫利神社が、雨乞いに御利益があるといわれていました。

御岳山でも古くから雨乞いを行っていたようですが、止雨の話はあまり聞きません。御嶽神社の場合、個人や地域の参拝者が中心で、農家にとって風雨がひどい時は、その対応に多くの人手がいり、神社へ人を遣わす余裕が無いからなのではないでしょうか、理由はよくわかりません。

関東地方では、今年の夏お盆の頃より雨が降らず、9月に入っても利根川水系では取水制限が出るほどで、8月27日と31日に練馬と国分寺の農家の方が来て、御嶽神社では十数年ぶりに雨乞いを行いました。御岳山の雨乞いは、農家の方自ら、山の水源地である神社から2キロ半ほど奥へ行った沢で、竹筒に水を汲み、杉の葉で栓をして戻り、神社で麻縄と紙垂^{しで}をつけてから祈祷し、休憩すること無く持ち帰り田畑に撒くと、やがて雨が降るといわれていました。神社でも久しぶりの事で、古老に伺い竹筒や祝詞を新たに作りましたが、お越しの方もお父さんやお祖父さん以来で、何もわからず言われるままに來たそうです。そして古来通り儀式を行い、休憩もとらず地元に戻ったそうです。途中で休憩すると、そこに雨が降ってしまうといわれているからです。



水を汲む様子

参考に今回奏上した祝詞を記します。神様に奏上する祝詞は、今日でも平安時代の『延喜式』に記載された祝詞を踏襲し、大和言葉で書かれていますが、送り仮名はひらがなにし、句読点を入れました。



麻縄と紙垂がつけられた竹筒

祈雨祝詞

千早振る神の御代より御代傳へ、窮み無く流れ行く多摩の川辺に峻り立ちて、武蔵野の原見霽かし、御嶽の山の巔に大宮柱太敷立て、天つ御虚空に千木高知りて、東國社禊の惣社と稱へ奉る、掛けまくも畏き御嶽大神の大前に、斎主〇〇、謹み敬ひ恐み恐みも白さく。

此の頃日を重ね月を重ね絶えて雨降らず、四方の國民が手肱に水泡搔垂り、向股に泥搔寄せて取作らむ、奥つ御年を始め草の片葉に至まで、損なひ枯れむとするを憂ふる「〇〇〇〇」の諸人等い。今日〇月〇〇日を吉日の足日と選び定め、水分の御嶽大神の大前に参詣奉り、御嶽の奥庭に湧く水を竹筒に収め、祓ひ清めて御祭厳しく美しく執行ひ。持ち帰りし大地は、奇しびに妙なる大神の大御稜威に依て雨雲大空打ち覆ひ、恵の篠突く雨降頻り、田も畑も天水満ち潤い足りて、豊に牟久佐加に成し幸へ給ひて、賑ふ里の楽しき里と成し幸へ給へと、畏み畏みも稱辞竟へ奉らくと白す。

参考：『日本古代の祈雨・祈止雨儀礼について』岡田干毅

(文責 須崎 直洋)

「文化財ニュース 300 号」によせて

文化財ニュースは、昭和 62 年 9 月の第 1 号発行から 27 年、今月 300 号を迎えました。10 名の文化財保護指導員が順に毎月 1 回原稿を寄せ、市郷土博物館の協力のもと発行してきました。

これからも、文化財指定に匹敵するような事物について、永く紹介していく所存です。毎月 15 日発行、郷土博物館・市立美術館・市民会館・各市民センター・中央図書館・市役所教育部社会教育課の窓口に常置されています。無料です。是非お読みください。

青梅市文化財保護指導員連絡協議会 会長 三好 ゆき江